

## 国語学

遠藤 邦基

国語漢文専攻科を出自とし、昭和二十三年の新制大学発足と同時に文学部国文科となり、平成十年には学科名に国語を冠して国語国文学科（平成十六年、改組により国語国文学専修）に改称したのは、専攻分野の細分化というよりは、それまでは古典文学の解釈のための補完的立場として見られることの多かった国語学が、ことば自体を研究対象とした独立した分野として認知されたことを意味する。ところで、昭和二十五年に創刊された関西大学国文学会編の機関誌『国文学』には、創刊当初から国語学関係の論文が掲載されてきた。

以下、専任教員を中心に非常勤、卒業生・学生の掲載論文名（副題略）を分野別に分類して、執筆者（敬称略）を号数とともに示す。

昭和二十六年発足の萬葉学会の本部がおかれていた本学には、澤瀉・吉永・木下・神堀・大濱という著名な万葉学者が在職。したがって上代の語学関係の論文も、阪倉「接尾語ラマ考」（三三号）をはじめとして、吉永「奈良朝特殊語法「ずは」について」

（二三号）、「已然形についての十二の問題」（四十四号）が載る。木下には上代語を中心とした「終助詞「なむ」の反事実性」（五十号）、「ミ語法」（五十二号）、「万葉集旧訓回懐」（六十八号）「万葉古今語雑考」（七十三号）、「万葉集古写本の本文改変」（六十七号）、「漢字音に言及した「万葉集題詞」（五十四号）」などがある。

神堀には上代語の語彙・語義論を中心にした「古事記の「あはれ」の語義をめぐって」（二十八号）、「大野」の原義」（四十五号）、「万葉集の「遊」をめぐって」（七十五号）などがある。文法論を専門とした土部は「連体格から連用格へ」（四号）、「提示語の「の」のある場合」（十一号）、「連体格用法の「ず」は連体形なりや」（二十一号）のほかに、「文脈と構成」（三十号）、「文章の基本様式」（三十九号）など文体関係の論も残している。なお、木下・神堀の指導を受けた鍵本は「万葉集動詞のアスペクト」（六十九号）、「詠嘆表現における主格表示」（七十七号）、「万葉集における連体修飾」（七十八号）など文法論や表現論で注目すべき論を発表している。

語順や構文論の研究で新分野を拓いた佐伯は、「敬語句構成型の構文的考察」（四十五号）、「万葉集の語順」（五十二号）、「物名による語順の先後」（六十八号）、「類義成分の先後」（七十四

号)など語順に関する論を多く残している。紙谷は「大蔵虎明本における待遇表現」(七十号)、「中世における疑問表現(八十号)などの中世の文法論を踏まえうえで、「現代日本語のモダリティについて」(六十八号)、「助動詞「ようだ」について」(七十一号)、「現代日本語の自動詞と他動詞」(七十八号)など、通史的観点からの現代文法論に斬新的な論を展開した。遠藤は、従来国語史の資料として殆ど顧みられることのなかった歌学者たちの講義録に残された読癖注記や古写本のミセケチ訂正の痕跡が、音韻史や表記史の好資料となりうることを、「音便の読癖」(七十五号)、「四つ仮名の読癖」(八十二号)、「仮名遣書と読癖」(九十二号)などで論じている。同様に俳諧・謎立などに多用される言語遊戯も国語史の資料と成りうることを「杖つきの「乃」の字」(八十三号)「川のほとりに牛は見えけり」(八十六号)などで論証している。

文字論を専門とする乾には「文字をめぐる思弁から」(九十三号)、言語地理学の高木には「大阪方言における動詞チガウに由来する諸形式の用法」(九十二号)がある。

国語学専攻の学生・大学院生が増加したことで、互いに切磋琢磨される環境ができ、注目すべき論文が多く発表されるようになる。以下、雑誌論文や学会発表等で、引用・参照されたり、

学会展望で紹介された論を中心に紹介する。

平安・鎌倉期の文献の影印の出版が盛んになったことで、当時の仮名字体や表記の確認が容易になり、それを利用することによる新たな視点からの研究が盛んになる。林田の「天理図書館蔵『一宮紀伊集』の表記」(八十九号)、「いづこの行方」(九十号)、「藤原定家筆『古記録切』について」(九十二号)、狩野の「日本大学図書館蔵『土佐日記』の表記」(九十一号)などは、活字本でなく影印によって仮名の字体(字形)を厳密に検証・確認することによってなった論である。陳贊の「基督教用語「天主」について」(九十号)、「慚愧」の意義変遷」(九十二号)は、ともに豊富な用例を駆使して語義の変遷を論じたものである。長井の「英訳本BOTCHANの考察」(八十九号)は、松山方言の微妙な表現(なもし)を如何に英語に翻訳するかという視点に基づいた論で、国語学(日本語学)よりは、むしろ外国語の研究者の間で注目された論である。井口は「原歌の振り仮名改革」(九十二号)、「戦中期における海外邦字新聞の字音仮名遣い」(九十五号)、「近代的メディアのルビの構造と字音仮名遣いの変相」(九十九号)など、現代仮名づかいに至るまでの軌跡を検証している。田中は「宗因七百韻」と『七百五十韻』の表記」(九十四号)、「近世初期俳諧の用字考証」(九十六

号)、「仮名遣から見た近世初期俳諧集(九十七号)」、「江戸八百韻」に見える「多」の訓みについて」(九十八号)など、江戸期の俳諧・韻書を対象にした表記論を精力的に発表している。

(えんどう くにもと／本学元教授)